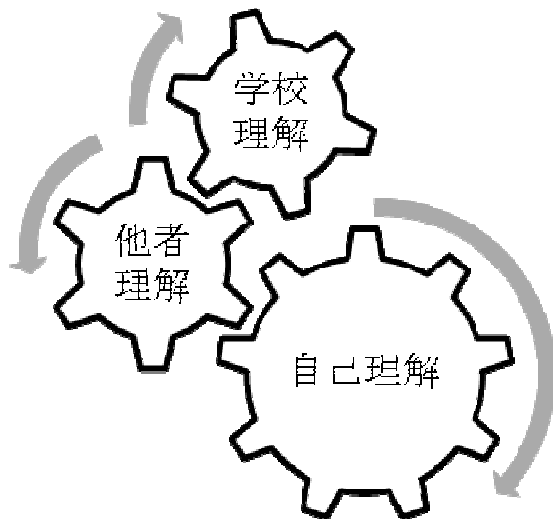


「自己の探求プログラムの体験が 大学生の心理的側面に及ぼす影響」



1. 研究の目的

本研究の目的は「自己の探求プログラムの体験（以下「自己の探求」と略す）」が大学生にもたらす心理的効果の科学的根拠を示すことである。本研究は自己の探求の効果を「自己理解の側面」、「他者理解の側面」、「学校理解の側面」の3側面から捉え（図1）、自己の探求を通して大学生にどのような心理的変容が生じているかを明らかにしていく。

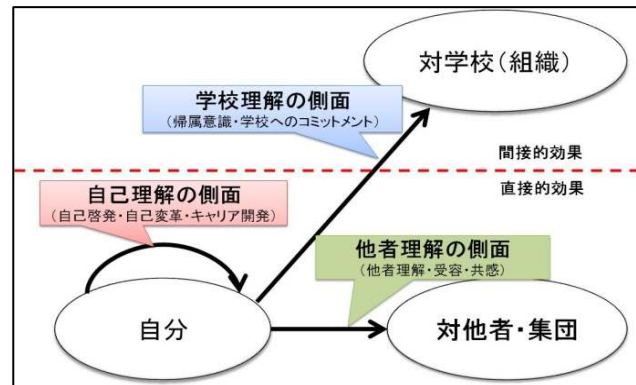


図1 自己の探求の介入効果

2. 研究の方法

2.1 対象者

「自己理解の変容」と「学校理解の変容」を明らかにするための調査では、首都圏と地方の大学6校に対して自己の探求を行い、参加者の中から無作為に選出した279名に対して質問紙調査を行った。

「他者理解の変容」を明らかにするための調査では、首都圏と地方の大学8校に対して自己の探求を行い、参加者の中から無作為に選出した321名に対して質問紙調査を行った。

2.2 質問紙

本研究の質問紙を作成するため、2007年から2008年にかけて予備調査を行った。そこでは、組織開発を体験した大学生140名の内省報告が専門化によって分析され、組織開発の効果に相当する記述が抽出された。それをもとに、「自己理解の変容」を捉えるための30項目（表1）と、「学校理解の変容」を捉えるための20項目（表3）、「他者理解の変容」を捉えるための40項目が作成され、本研究に用いられた。それぞれの項目に対する回答方法としては、「そう思わない（1点）」から「そう思う（5点）」までの5件法を採用した。

2.3 研究の手続き

本研究で用いられる自己の探求は、LV社のプログラムに基づくものであり、「自己理解の変容」と「学校理解の変容」の調査には7名の、「他者理解の変容」の調査では9名のファシリテーターが介入を行った。調査はプログラムの終了直後に実施した。

2.4 分析の手続き

得られたデータは統計解析ソフトSPSS15.0による解析が行われた。本資料では因子分析と記述統計による基礎集計結果をまとめるものとする。

3. 結果

3.1 「自己理解の変容」に関する結果

(1) 「自己理解の変容」の構造

「自己理解の変容」を扱う30項目を用いた因子分析（主因子法、バリマックス回転）の結果を表1に示した。この結果は、自己理解の変容は7つの側面から理解することが妥当であることを示している。具体的には、「広い視野の獲得（第1因子）」、「セルフコントロール（第2因子）」、「目標の達成と創造（第3因子）」、「ポジティブシンキング（第4因子）」、「問題解決（第5因子）」、「個性の活用（第6因子）」、「自己受容（第7因子）」という7つの効果が確認されたのである。本研究の対象者においては、とりわけ「広い視野の獲得」や「セルフコントロール」が独立性の高い効果として認められた。

表1 「自己理解の変容」の30項目における因子分析結果

因子名	項目	因子負荷量						
		F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
広い視野の獲得	物事を考える視野が広がりそう	0.80	0.17	0.15	0.28	0.05	0.14	0.10
	考え方の幅が広がりそう	0.76	0.18	0.18	0.28	0.08	0.10	0.09
	自分を新たな視点で捉えられそう	0.63	0.22	0.23	0.18	0.14	0.17	0.09
	自分の可能性に気づけそう	0.60	0.09	0.39	0.09	0.22	0.26	0.24
セルフ・コントロール	冷静に自分と向き合えそう	0.17	0.70	0.12	0.15	0.14	0.18	0.03
	自分と正面から向き合えそう	0.21	0.68	0.09	0.13	0.30	0.32	0.17
	人にまどわされないう物事に取り組めそう	0.06	0.54	0.14	0.08	0.03	0.02	0.14
	新しい自分を発見できそう	0.40	0.51	0.11	0.09	0.15	0.30	0.05
	自分とうまく接することができそう	0.18	0.49	0.19	0.18	0.19	0.15	0.28
	自分のペースで生活できそう	0.06	0.36	0.15	0.11	0.05	0.00	0.13
目標の達成と創造	自分の目標がみつきりそう	0.19	0.27	0.75	0.14	0.10	0.19	0.09
	うまく目標を立てることができそう	0.19	0.21	0.65	0.17	0.17	0.16	0.10
	自分の目標を達成できそう	0.10	0.25	0.61	0.28	0.16	0.18	0.11
	将来の自分をイメージできそう	0.18	0.03	0.58	0.12	0.13	0.06	0.22
	自分の未来が広がっていきそう	0.41	0.22	0.48	0.16	0.23	0.18	0.18
ポジティブ・シンキング	前向きに物事に取り組めそう	0.31	0.25	0.12	0.64	0.18	0.16	0.19
	思い切って何かに挑戦できそう	0.19	0.09	0.30	0.64	0.20	0.20	0.08
	積極的に行動を起こすことができそう	0.20	0.18	0.33	0.63	0.20	0.19	0.19
	状況の良い側面に目が向けられそう	0.35	0.39	0.04	0.52	0.16	0.11	0.25
	物事をポジティブに考えられそう	0.20	0.29	0.13	0.51	0.23	0.15	0.36
	いろいろなことに興味を持てそう	0.23	0.09	0.21	0.50	0.17	0.35	0.02
問題解決	困難に立ち向かえそう	0.15	0.21	0.17	0.21	0.83	0.17	0.18
	嫌なことと向かい合えそう	0.10	0.17	0.27	0.25	0.64	0.13	0.17
	課題を克服できそう	0.18	0.23	0.21	0.33	0.52	0.23	0.12
個性の活用	長所と短所を活かせそう	0.17	0.19	0.20	0.26	0.15	0.62	0.08
	短所をなおし長所をのばすことができそう	0.21	0.20	0.26	0.27	0.12	0.60	0.17
	自分の持ち味を活かせそう	0.27	0.21	0.20	0.20	0.25	0.56	0.25
自己受容	自分を好きになれそう	0.12	0.34	0.29	0.16	0.19	0.16	0.76
	自分を大切にできそう	0.18	0.37	0.22	0.24	0.16	0.16	0.60
	自分に自信がもてそう	0.25	0.23	0.26	0.29	0.29	0.19	0.47
	固有値	3.25	3.12	3.06	3.03	2.24	2.00	1.95
	累積寄与率	10.84	21.23	31.44	41.55	49.02	55.68	62.16
	α係数	0.89	0.81	0.86	0.89	0.86	0.88	0.82

(2) 本研究の参加者における自己理解の変容

本研究の参加者における「自己理解の変容」の基礎集計結果を示したものが表2である。さらに図2には、同様の結果が棒グラフで示されている。得点は3点以上で5点に近ければ近いほど、より高い「自己理解の変容」の効果が達成されたものとみなすことができる。また、7因子の因子間相関はいずれも有意であった ($r=0.40\sim 0.70, p<0.001$)。以上の結果は、次の3点に集約される。

- ①全ての大学の参加者において、自己理解の変容が認められた。
- ②本研究の参加者の多くは、自己の探求の効果として「広い視野の獲得」と「セルフコントロール」、「ポジティブシンキング」をとりわけ実感している。
- ③自己理解の変容に関する全ての効果は相関関係にあり、同時に生起する傾向にある。

表2 自己の探求によって生じた自己理解の変容 (6大学)

自己理解の側面	A		B		C		D		E		F		全体(N=279)	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
1.広い視野の獲得	4.29	0.59	3.59	0.99	4.22	0.70	3.71	1.00	4.47	0.47	4.30	0.54	4.18	0.73
2.セルフ・コントロール	3.79	0.65	3.78	0.77	3.90	0.60	3.63	0.85	4.25	0.46	3.92	0.66	3.87	0.66
3.目標の達成と創造	3.58	0.84	3.27	0.95	3.49	0.72	3.41	0.99	3.78	0.55	3.74	0.57	3.54	0.78
4.ポジティブ・シンキング	3.91	0.75	3.60	1.05	3.97	0.74	3.68	0.82	4.25	0.47	4.02	0.78	3.93	0.78
5.問題解決	3.55	0.88	3.45	1.01	3.72	0.75	3.43	1.09	3.93	0.52	3.67	0.90	3.64	0.85
6.個性の活用	3.60	0.78	3.31	1.08	3.73	0.79	3.73	0.78	3.85	0.75	3.80	0.71	3.67	0.81
7.自己受容	3.50	0.84	3.23	1.10	3.61	0.88	3.65	1.01	4.06	0.56	3.52	0.93	3.58	0.90

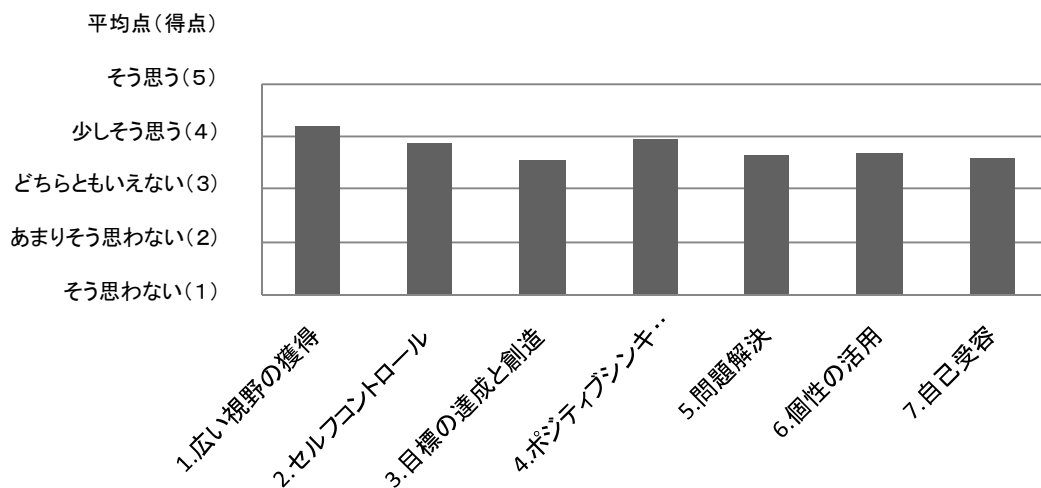


図2 自己の探求によって生じた自己理解の変容 (6大学)

3.2 「学校理解の変容」に関する結果

(1) 「学校理解の変容」の構造

「学校理解の変容」を扱う20項目を用いた因子分析（主因子法、バリマックス回転）の結果を表3に示した。この結果は、学校理解の変容は6つの側面から理解することが妥当であることを示している。具体的には、「学校での友人づくり（第1因子）」、「学校行事への参加（第2因子）」、「学校への信頼（第3因子）」、「学業への興味（第4因子）」、「学校生活の充実（第5因子）」、「学校への適応（第6因子）」、という6つの効果が確認されたのである。本研究の対象者においては、とりわけ「学校での友人づくり」や「学校行事への参加」が独立性の高い効果として認められた。

表3 「学校理解の変容」の20項目における因子分析結果

因子名	項目	因子負荷量					
		F1	F2	F3	F4	F5	F6
学校での友人づくり	学校で友達ができそうだ	0.87	0.19	0.13	0.11	0.18	0.18
	学校で仲間と話す機会が増えそうだ	0.77	0.29	0.06	0.18	0.21	0.17
	学校で知り合いがふえそうだ	0.77	0.17	0.13	0.14	0.07	0.15
学校行事への参加	学校で夢中になれる活動が見つかりそうだ	0.24	0.80	0.15	0.19	0.15	0.09
	学校のイベントに積極的になれそうだ	0.23	0.79	0.20	0.11	0.25	0.21
	学校行事に興味を持てそうだ	0.30	0.68	0.22	0.25	0.24	0.17
	学校で何かに取り組むことができそうだ	0.17	0.43	0.26	0.26	0.41	0.11
学校への信頼	学校を頼りに出来そうだ	0.07	0.15	0.83	0.18	0.20	0.17
	学校にいろいろ期待できそうだ	0.12	0.20	0.75	0.23	0.21	0.21
	学校をうまく利用できそうだ	0.18	0.19	0.59	0.28	0.07	0.19
学業への興味	学問に興味を持てそうだ	0.16	0.11	0.23	0.86	0.13	0.04
	好きな授業が見つかりそうだ	0.08	0.20	0.14	0.64	0.10	0.24
	学ぶことの価値がわかりそうだ	0.20	0.17	0.25	0.54	0.20	0.07
学校生活の充実	学校が好きになれそうだ	0.25	0.36	0.35	0.23	0.63	0.24
	学校生活が充実しそうだ	0.38	0.34	0.22	0.16	0.53	0.37
	学校生活が楽しくなりそうだ	0.40	0.34	0.19	0.19	0.53	0.31
	学校に足が向きそうだ	0.14	0.31	0.22	0.27	0.50	0.30
学校への適応	学校の雰囲気になれそうだ	0.30	0.22	0.20	0.19	0.33	0.65
	リラックスした学校生活が送れそうだ	0.20	0.13	0.35	0.12	0.13	0.58
	学校に心地よい居場所ができそうだ	0.38	0.19	0.30	0.17	0.26	0.50
	固有値	2.99	2.85	2.50	2.16	1.99	1.78
	累積寄与率	14.98	29.24	41.77	52.57	62.55	71.49
	α 係数	0.92	0.90	0.87	0.80	0.90	0.83

(2) 本研究の参加者における「学校理解の変容」

本研究の参加者における「学校理解の変容」の基礎集計結果を示したものが表4である。さらに図3には、同様の結果が棒グラフで示されている。得点は3点以上で5点に近ければ近いほど、より高い「学校理解の変容」の効果が達成されたものとみなすことができる。また、6因子の因子間相関はいずれも有意であった ($r=0.30\sim 0.70, p<0.001$)。以上の結果は、次の3点に集約される。

- ①全ての大学の参加者において、学校理解の変容が認められた。
- ②本研究の参加者の多くは、自己の探求の効果として「友人づくり」と「学校生活」、「学校適応」をとりわけ実感している。
- ③学校理解の変容に関する全ての効果は相関関係にあり、同時に生起する傾向にある。

表4 自己の探求によって生じた学校理解の変容 (6大学)

学校理解の側面	A		B		C		D		E		F		全体(N=279)	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
1.学校での友人づくり	4.48	0.65	4.25	0.77	4.37	0.74	3.92	1.11	4.38	0.74	4.33	0.73	4.35	0.76
2.学校行事への参加	3.70	0.93	3.55	1.15	3.87	0.86	3.41	1.13	3.96	0.57	3.99	0.86	3.79	0.92
3.学校への信頼	3.82	0.81	3.75	0.84	3.61	0.81	3.48	1.12	3.99	0.76	3.82	0.70	3.73	0.83
4.学業への興味	3.83	0.80	3.65	0.80	3.81	0.75	3.27	1.21	4.14	0.58	3.90	0.75	3.80	0.81
5.学校生活の充実	4.16	0.75	3.94	0.78	4.06	0.75	3.70	1.14	4.28	0.55	4.14	0.82	4.08	0.79
6.学校への適応	4.00	0.80	3.81	0.80	3.90	0.70	3.57	1.01	4.16	0.60	4.01	0.79	3.93	0.77

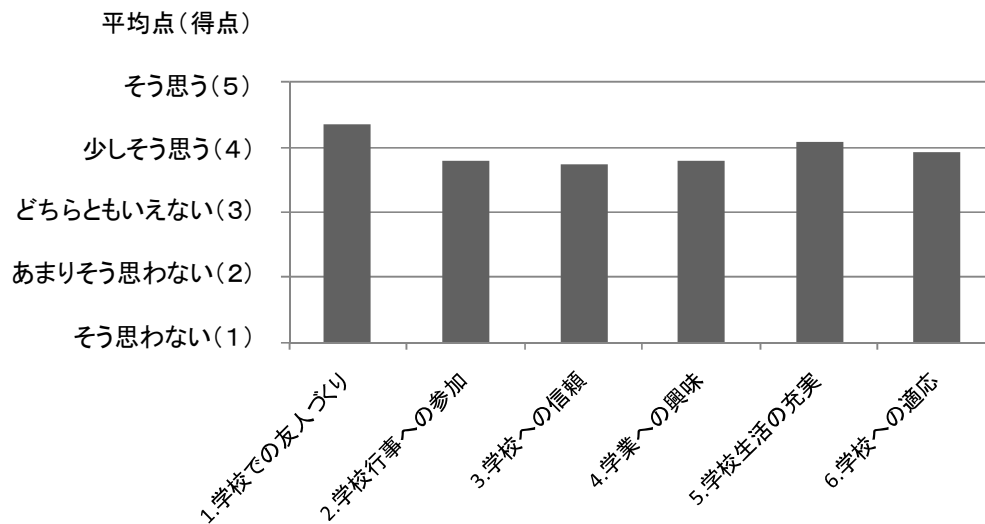


図3 自己の探求によって生じた学校理解の変容 (6大学)

3. 3 「他者理解の変容」に関する結果

(1) 「他者理解の変容」の構造

「他者理解の変容」を扱う40項目を用いた因子分析（主因子法、バリマックス回転）の結果を表3に示した。この結果は、自己理解の変容は5つの側面から理解することが妥当であることを示している。具体的には、「周囲への貢献（第1因子）」、「他者の尊重（第2因子）」、「他者の受容（第3因子）」、「自己受容（第4因子）」、「他者への信頼（第5因子）」、という5つの効果が確認されたのである。本研究の対象者においては、とりわけ「他者の尊重」や「他者の受容」が独立性の高い効果として認められた。

表5 「学校理解の変容」の20項目における因子分析結果

因子名	項目	因子負荷量				
		F1	F2	F3	F4	F5
周囲への貢献	集団をまとめることができそう	0.80	0.11	0.04	0.17	0.12
	周囲にリーダーシップを発揮できそう	0.77	0.11	-0.03	0.18	0.15
	まわりに良い影響を与えられそう	0.73	0.11	0.15	0.20	0.23
	みんなに貢献できそう	0.73	0.18	0.29	0.15	0.15
	チームワークをひきだせそう	0.71	0.24	0.26	0.15	0.10
	グループでの自分の役割が見つかりそう	0.71	0.19	0.29	0.24	0.10
	人の役にたてそう	0.70	0.23	0.23	0.20	0.27
	チームのバランスをとれそう	0.68	0.23	0.29	0.18	0.09
	リーダーを支えられそう	0.68	0.21	0.24	0.14	0.15
	人の期待に応えられそう	0.66	0.20	0.24	0.19	0.29
	人のために何かできそう	0.58	0.31	0.31	0.16	0.21
	相手に伝わるように自己主張できそう	0.54	0.28	0.23	0.41	0.12
	思いきって人に意見を言えそう	0.51	0.31	0.21	0.35	0.06
	人の自分に対する評価を引き出せそう	0.51	0.32	0.16	0.16	0.30
	人に意見を求めることができそう	0.50	0.34	0.22	0.25	0.20
相手の気持ちを考えながら意見ができそう	0.50	0.43	0.34	0.20	0.08	
人と話しやすい雰囲気がつくれそう	0.45	0.25	0.34	0.38	0.23	
他者の尊重	人の話に耳を傾けることができそう	0.09	0.66	0.22	0.17	0.02
	素直に人の意見を聞けそう	0.17	0.65	0.20	0.10	0.11
	相手の意見に関心が持てそう	0.18	0.64	0.40	0.15	0.13
	人の気持ちになって考えることができそう	0.30	0.58	0.33	0.14	0.18
	人の意見を大切にできそう	0.19	0.57	0.23	0.18	-0.01
	相手の本音に気づけそう	0.46	0.55	0.09	0.14	0.27
	人の考えを理解することができそう	0.36	0.54	0.15	0.14	0.26
他者の受容	人の良い側面に目を向けられそう	0.23	0.38	0.63	0.17	0.21
	人の個性を尊重することができそう	0.23	0.42	0.63	0.19	0.10
	人から学ぶことができそう	0.26	0.36	0.63	0.15	0.06
	人の個性を認めることができそう	0.24	0.39	0.58	0.20	0.13
	人を受け入れることができそう	0.23	0.37	0.53	0.28	0.35
	心地よい時間を相手と過ごすことができそう	0.31	0.22	0.49	0.30	0.33
	人を大切にできそう	0.22	0.39	0.43	0.14	0.38
	人の自分に対する評価を参考にできそう	0.35	0.34	0.41	0.11	0.14
自己開示	人前でもっと自分をさらけ出せそう	0.41	0.21	0.20	0.71	0.16
	人に心を開けそう	0.30	0.22	0.22	0.69	0.34
	人に本音で話せそう	0.36	0.21	0.21	0.63	0.28
	人にもっと自分を知ってもらえそう	0.35	0.31	0.17	0.49	0.32
	相手とリラックスした関係が築けそう	0.40	0.27	0.35	0.45	0.29
他者への信頼	人に甘えられそう	0.24	0.10	0.10	0.17	0.78
	人をあてにできそう	0.21	0.08	0.14	0.20	0.66
	人を信頼できそう	0.29	0.18	0.34	0.36	0.54
	固有値	19.73	2.73	1.85	1.13	1.11
	累積寄与率	49.3	56.2	60.8	63.6	66.4
	α 係数	0.96	0.88	0.91	0.91	0.81

(2) 本研究の参加者における「他者理解の変容」

本研究の参加者における「他者理解の変容」の基礎集計結果を示したものが表6である。さらに図5には、同様の結果が棒グラフで示されている。得点は3点以上で5点に近ければ近いほど、より高い「他者理解の変容」の効果が達成されたものとみなすことができる。また、5因子の因子間相関はいずれも有意であった ($r=0.40\sim 0.80, p<0.001$)。以上の結果は、次の3点に集約される。

- ①全ての大学の参加者において、他者理解の変容が認められた(3点以上)。
- ②本研究の参加者の多くは、自己の探求の効果として「他者の尊重」と「他者の受容」、をとりわけ実感している。
- ③他者理解の変容に関する全ての効果は相関関係にあり、同時に生起する傾向にある。

表6 自己の探求によって生じた他者理解の変容(8大学)

他者理解の側面	A		B		C		D		E		F		G		H		全体(N=321)	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
1.他者への貢献	3.68	0.77	3.88	0.89	4.03	0.57	4.07	0.53	3.44	0.62	4.07	0.51	3.54	0.76	3.84	0.52	3.78	0.73
2.他者の尊重	4.32	0.60	4.25	0.60	4.55	0.31	4.53	0.40	4.35	0.36	4.57	0.28	4.06	0.65	4.40	0.46	4.34	0.55
3.他者の受容	4.25	0.67	4.17	0.75	4.60	0.41	4.62	0.40	4.44	0.43	4.65	0.42	4.10	0.61	4.33	0.46	4.34	0.61
4.他者への自己開示	3.82	0.91	3.95	0.90	4.05	0.58	4.26	0.64	3.97	0.78	4.13	0.59	3.72	0.83	3.96	0.49	3.95	0.81
5.他者への信頼	3.46	0.97	3.95	0.80	3.73	0.66	3.86	0.74	3.44	0.86	3.67	0.82	3.52	0.91	3.60	0.60	3.63	0.87

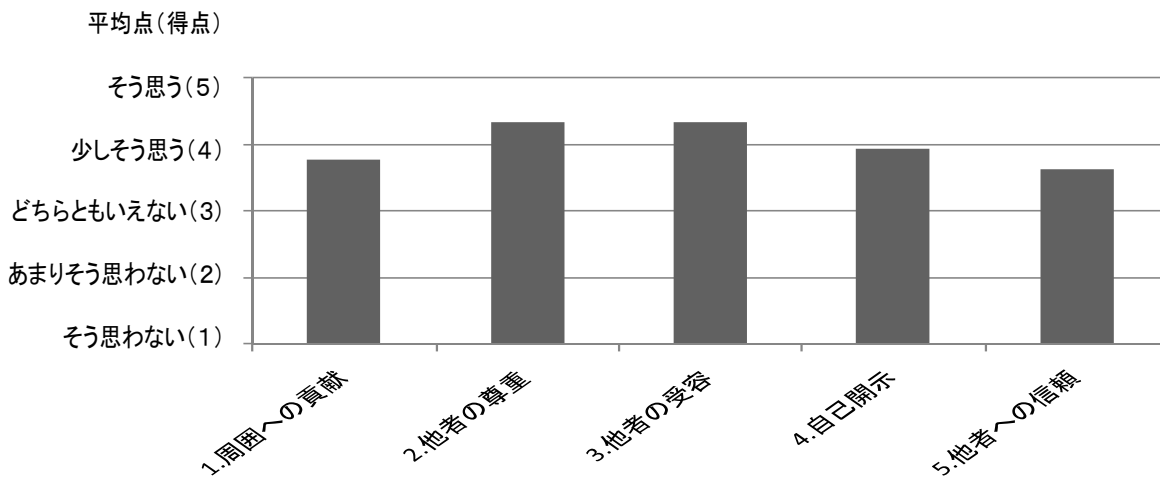


図4 自己の探求によって生じた他者理解の変容(4大学)

4. まとめ

本研究により、自己の探求によって大学生の自己理解、他者理解が促されること。そして学校（大学）に対してもポジティブな理解がもたらされることが明らかにされた。また、自己の探求による2次的な効果（間接効果）として想定した学校理解の変容が確かめられたことなどは、重要な発見といえる。近年、大学生の自己啓発やキャリア教育を目的として、また大学教育の一環として組織開発が導入されるようになったが、本研究の結果はその効果を裏付けるための基礎資料として十分な成果を提供したといえよう。

<本研究の学術的成果>

1. 芳地泰幸、山田泰行、水野基樹「組織開発が大学生の心理的側面に及ぼす影響—大学に対する理解の変容に着目して—」第38回人類労働学会東日本地方会『人類労働学会会報』第91号、2009年、12頁。
2. 水野基樹、山田泰行、芳地泰幸、住田暁弘、北森義明「大学教育における組織開発の体験が大学生にもたらす効果に関する研究」『初年次教育学会第3回大会発表要旨集』2010年、108-109頁。
3. 山田泰行、水野基樹、芳地泰幸「組織開発の体験は大学生の自己理解の変容をもたらすか?」『産業・組織心理学会第25回大会発表論文集』2009年、91-94頁。
4. Yasuyuki HOCHI, Yasuyuki YAMADA, Motoki NIZUNO (2010). Effects of Organizational Development on the Psychological Aspects among University Students. International Conference for the 40th Anniversary of Human Ergology Society Program and Abstracts, pp.39-40.

<引用・参考文献>

5. French, W. L., & Bell, C.H. (1999). Organization development: Behavioral science interventions for organization improvement. 6th edition. Prentice Hall.
6. 稲葉元吉「組織開発論（上）—その主要内容—」『組織科学』第7巻、第4号1973年、4-14頁。
7. 稲葉元吉「組織開発論（下）—その現状評価—」『組織科学』第9巻、第1号1975年、69-81頁。
8. 北森義明「組織が活きるチームビルディング」東洋経済新報社、2008年。
9. 北森義明「チームビルディング」『鹿屋体育大学学術紀要』第8号、1992年、113-114頁。
10. Luthans, Fred (1992). Organizational Behavior. 6th edition. McGraw-Hill Book Co-singapore.
11. 水野基樹「新しい生き方を探る9 チームビルディング」労働科学研究所『労働の科学』第59巻、第7号2004年、42頁。
12. 水野基樹「企業に生かすスポーツ心理学18 絆の強いチームを作るためのチームビルディング」労働科学研究所『労働科学』第64巻、第9号2009年、57頁。
13. 森 朋子、山田 剛史「初年次教育における協調学習が及ぼす効果とそのプロセス：学生同士の〈足場づくり〉を中心に」『京都大学高等教育研究』第15号、2009年、37-46頁。
14. 中村 和彦「組織開発(OD)とは何か? (特集 関係の開発)」『人間関係研究 (南山大学人間関係研究センター紀要)』第6号、2007年、1-27頁。
15. 仲野好重、桜本和也「大学一年生にとっての「自分探し」とは何か?：—初年次教育としての自己発見授業とアイデンティティの模索—」『大手前大学論集』第10号、2009年、177-195頁。
16. 小川宣子、富士霸王、久世均、後藤忠彦「学士力育成にあたっての初年次教育の構築」『岐阜女子大学紀要』第39号2010年、1-6頁。
17. 佐古 秀一、山沖 幸喜「学力向上の取り組みと学校組織開発：学校組織開発理論を活用した組織文化の変容を通じた学力向上取り組みの事例」『鳴門教育大学研究紀要』第24号、2009年、75-93頁。
18. 産業・組織心理学会編「産業・組織心理学ハンドブック」丸善株式会社、2009年。